

地域学習における学校と地域との連携

— 京都府南丹市美山町にあった小学校を事例として —

高原佳穂

(京都大学文学部)

河本大地

(奈良教育大学 社会科教育講座 (地理学))

Collaboration between Schools and the Locals in Local Studies:

A Case Study of Former Elementary Schools in Miyama-cho, Nantan City, Kyoto Prefecture

Kaho TAKAHARA

(Faculty of Letters, Kyoto University)

Daichi KOHMOTO

(Department of Geography, Nara University of Education)

要旨：本稿の目的は、学校教育における地域と連携・協働した地域学習の体系を構築している京都府南丹市美山町の美山小学校・美山中学校における「美山学」について、それが成立する前のへき地・小規模校における長年の取組の中で育まれてきた実践を整理することである。美山小学校は2016年に美山町内の5小学校を再編して開校したが、その前から地域資源の活用が各小学校で行われていた。本研究では新聞記事や小学校再編時に作成された各校の閉校記念誌などを参照し、「美山学」成立の前段階における学校と地域との関係について検討した。地域が主体となって学校を支援する例としては、育友会や読み聞かせ団体の活動があった。地域学習は各校で多岐にわたる活動が展開されたが、実際に地域の人と関わりながら進められた実践が多かった。また特別活動や行事などでも地域との交流が活発で、地域と合同で行事を開催するなど密接な連携が見られた。このように美山町では学校と地域との連携・協働が早くから活発であり、これらが土台となって「美山学」が成立したと考えられる。

キーワード：地域学習 local study

地域との連携 collaboration with the locals

小規模校 small school

へき地教育 rural education

美山学 Miyama-gaku (local study of Miyama)

1. はじめに

本稿の目的は、学校教育における地域と連携・協働した地域学習の体系を構築している京都府南丹市美山町の美山小学校・美山中学校における「美山学」について、それが成立する前のへき地・小規模校における長年の取組の中で育まれてきた実践を整理することである。日本全国で学校における地域との連携の必要性が強調され、また公立学校の小規模化が進んでいる中、学校統廃合により閉校した学校の事例であっても、地域に立脚した学校経営や教育実践から学べることは多いと考えた。また、本稿には記録としての意義もあると思われる。

さて、2017年(平成29年)3月告示の新学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」の実現が重視されて

おり、そのためには地域と学校の連携が重要とされている。その具体的な連携の枠組みとしては、コミュニティ・スクール(学校運営協議会)や地域学校共同活動が挙げられている。地域と学校の連携という点では、地域が学校運営に関与するというだけではなく、具体的な教育活動での地域資源の活用も効果的である。例えば小中学校の学習指導要領社会編では児童生徒の身近な地域や生活圏を対象とした実践が求められている(松尾ほか2019)。学校教育における地域学習では、地域との連携が期待される。

そもそも地域学習は、社会科・地理歴史科や総合的な学習の時間で従来から実践されてきた。篠原(1992)は香川県を事例として小学校3学年の社会科「身近な地域」の学習に注目し、授業実態として各学校で開発した教材の活用不足や指導計画の画一性などが指摘されること、また教師が地域学習に難しさを感じていることを

明らかにした。松尾ほか（2019）は大分県の公立小学校の教員にアンケート調査を実施し、高学年配属の教員は地域学習の負担が大きいと感じる傾向にあること、若手教員ほど教材開発に悩みを抱えていることなどを示した。友居（2022）も尼崎市内の小学校第3・4学年の教諭にアンケート調査や聞き取り調査を実施し、教科書の事例を学習した後に尼崎市や兵庫県について調べるといふ学習過程が児童の学習意欲を減退させていることや地域学習が十分行われておらず教師が指導に困難を感じていることを明らかにした。また社会科・地理歴史科における具体的な授業実践の検討は竹内（2019）、菱山（2022）などが行っており、教材開発の観点からは大坂ほか（2021）、橋本（2018）の研究がある。総合的な学習の時間における地域学習についても研究蓄積がある。太田・米正（2021）は高大連携事業を事例に教材開発を行っており、ほかに佐藤（2021）や三橋（2021）、入江ほか（2018）などの事例研究もある。また少数ではあるが藤崎（2021）のように社会科・地理歴史科や総合的な学習の時間以外の教科と地域学習とを関連させた例もある。

しかし、地域学習について学校が十分に地域と連携できている事例は少なく、地域学習が教科ごとに個別に行われている場合が多いことは否めない。その中で先進的な事例とされるのが京都府南丹市の美山小学校・中学校で取り組まれている「美山学」である。「美山学」とは美山小学校・中学校における地域との連携・協働による教育活動およびその体系のことであり、育みたい資質能力を整理して地域資源を活用した学習を教科横断的に展開している点が特徴である。

2. 対象事例の概要

京都府南丹市は京都府のほぼ中央に位置しており、美山町はその北東部に位置する（図1）。南丹市は2006年に船井郡園部町・八木町・日吉町、北桑田郡美山町が合併して成立し、美山町内の各小学校は美山町立から南丹市立へと名称が変更された。合併当時の美山町には知井

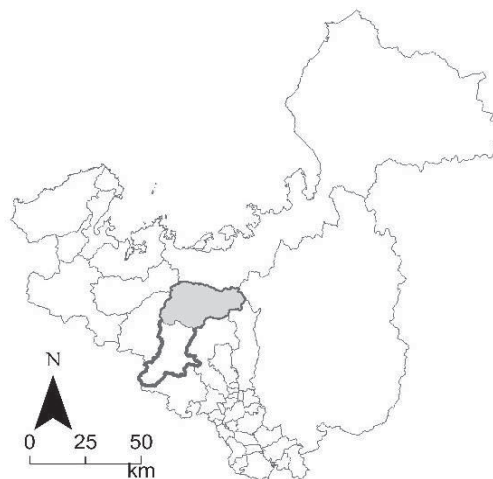


図1 南丹市美山町の位置

太枠部が南丹市、着色部が南丹市美山町である。ArcGIS Proを用いて筆者作成。行政区域と美山町の範囲（美山中学校区）は国土数値情報による。京都府の市区町村と、美山町に隣接する福井県および滋賀県の領域を記している。



図2 美山町内の小学校の立地

知井、平屋、鶴ヶ岡、大野、宮島小学校と各校の分校の位置を示した。分校名の後の（）内は最終閉校年。ArcGIS Proを用いて筆者作成。小学校再編以前の小学校区と学校の位置は国土数値情報による。分校の位置と最終閉校年は南丹市立文化博物館（2017）による。

小学校、平屋小学校、鶴ヶ岡小学校、大野小学校、宮島小学校の5つの小学校があった(図2)。この小学校区と対応する形で各地区には地域の振興会がおかれており、当時は学校運営協議会や地域連携コーディネーターの制度こそなかったものの、各小学校で地域と連携した教育活動が展開されていた。しかし児童数の減少により複式学級が増加し、2016年度に5小学校が再編されて美山小学校が開校した。美山小学校は旧宮島小学校の校舎を使用している。美山町内の中学校は1992年度以降美山中学校1校のみであり、小学校再編により南丹市美山町では中学校区と小学校区が一致した。これにより小中一貫の教育が可能となっている。

「美山学」とは美山小学校・中学校で一体となって進められている教育実践であり、地域との連携・協働における教育活動と位置付けられている(南丹市立美山小学校2018)。地域との協働という点で単なる地域学習とは異なっており、また「美山学」は教科横断的であるという特徴を有する。

美山小学校は開校当初から地域連携コーディネーターを配置し、コミュニティ・スクール推進校としてコミュニティ・スクール推進委員も設置した。2018年度より学校運営協議会制度を取り入れてコミュニティ・スクールとなった。また美山中学校には2019年度から地域連携コーディネーターが配置され、2020年度にコミュニティ・スクールとなった。「美山学」における地域との連携では地域連携コーディネーターが大きな役割を担っている。

さて、美山小学校・中学校における学校と地域との関わりを論じた研究には大東(2020)がある。大東はコミュニティ・スクールにおける熟議に焦点を当て、熟議を通して地域住民が学校経営の主体としての認識を獲得しつつあることを論じた。しかし、「美山学」そのものに焦点を当てた研究はなされておらず、また2016年度の小学校統合以前に美山町内の各小学校でどのような地域との連携があったのかは十分に明らかにされていない。閉校から7年近く経過した現在、統合前の小学校における実践の記録は失われつつある。だが学校の地域との連携がより一層重視される中で、また公立学校の小規模化が進む中で、統合前の各小学校の実践には参照すべきものがある。

そこで本稿では、統合に伴い閉校となった美山町内の小学校の閉校記念誌や新聞記事などを資料として「美山学」成立の前段階における学校と地域との関係について検討し、旧来の取組みが「美山学」の土台となっていたことを明らかにする。本稿には失われゆく統合前の実践を記録・整理するという意義もある。

3. 地域による学校教育の支援

3.1. 育友会を中心とした支援

地域による学校教育の支援は古くから行われており、各小学校の育友会がその中核を担っていた。例えば鶴ヶ岡小学校や宮島小学校の育友会は1970年代から地元の農林業の道具や生活必需品等を収集し、空き教室に展示していた。鶴ヶ岡小学校育友会の場合、1978年に旧校舎の残りを活用した資料館建設が計画された(南丹市教育委員会・鶴ヶ岡小学校閉校事業実行委員会2016)。宮島小学校では1974年に民具資料館設置のための準備が開始され、同年10月には第一次資料館が完成したという。一部は府の補助金を利用したが費用の大半は地元住民が負担した。また1976年11月には第二資料館の設置準備が始まり翌年3月に完成したという(南丹市立文化博物館2017, 宮島小学校閉校事業実行委員会2016)。このように収集された民具の量は展示スペースが不足するほどであったが、美山郷土資料館の開館にあわせ、郷土資料館で展示することになった¹。また知井小学校の場合、1952年に知井小学校育友会、知井中学校育友会、北桑田高校定時制知井分校育友会が合併し、知井学園育友会を設立した。同様に3校の同窓会も合併して知井学園同窓会が設立され、育友会と同窓会が共同で小学校へのピアノ寄贈(1967年)や図書購入、施設の改善などに取り組んだ(知井小学校閉校記念事業実行委員会2016, 南丹市立文化博物館2017)。育友会は1975年に分校の定数問題に関して府庁に陳情したり1988年には八ヶ峰中学校統合問題についての学習会を開催したりするなど、活発な活動を展開した(知井小学校閉校記念事業実行委員会2016)。

3.2. ボランティア団体の読み聞かせ活動

また、2000年代頃からはボランティアが各小学校で絵本の読み聞かせを行う事例も確認された。鶴ヶ岡小学校では2005年以降読み聞かせ団体・赤ずきんが月に2~4回活動した(南丹市教育委員会・鶴ヶ岡小学校閉校事業実行委員会2016)。知井小学校では2007年頃から「おむすび」という読み聞かせ団体が活動を展開した(知井小学校閉校記念事業実行委員会2016)。大野地域には「ゆきんこ」、宮島地区には「みーやの本箱」、平屋地区には「平屋読み聞かせの会」という読み聞かせボランティア団体があり、毎月1~4回絵本や童話、地元の物語を語っていたという。なお、小学校再編後は各グループが連携し読み聞かせが続けられている²。

4. 各小学校における授業内での地域学習の取組み

本章では各小学校における授業内での地域学習を①調べ学習・作文指導、②自然・環境学習、③同和教育、④

へき地教育、⑤副読本発刊とのかかわりなどの項目別にまとめた。ただし、1つのカテゴリーのみにおさまる実践事例は多くなく、大半が「環境学習と作文教育」などと複数の側面を持つ。

4.1. 調べ学習・作文指導と地域学習

作文教育は地域学習を取り込みながら展開された。北桑田地域（現在の南丹市美山町と京都市右京区京北）全体の取組みとして昭和20年代後半より文集が発刊されたほか（北桑田近代教育誌刊行会1991）、地域学習を含めた様々な学習成果を冊子にまとめる活動が各小学校で実施されてきた。その中でもとりわけ作文教育に力を入れてきたのが知井小学校である。知井小学校では戦後、「生活綴り方」として日々の暮らしをありのままに書き取る活動が熱心に取り組まれた。1963年には書くことを通して物事をよく見つめ考える力・感じる心を育てる国語教育のまとめとして、学校文集『知井ノ子』創刊号を出版した。『知井ノ子』は閉校年の第62号まで発刊され続け、府下小国語教育研究会からも高い評価を得た³（図3）（知井小学校閉校記念事業実行委員会2016）。



図3 知井小学校文集『知井ノ子』
旧知井小学校内の展示室にて筆者撮影。

また、知井小学校のふるさと体験学習は1996年に京都府教育委員会の「さわやか賞」奨励賞を受賞した⁴。毎年田植え体験や田歌地区での祇園祭、夏休みの調査活動などで地域の支援を受けていたという。これらの活動の成果は冊子にまとめて発表していた（知井小学校閉校記念事業実行委員会2016）。その例として、栽培飼育活動の成果をまとめた『知井っ子農園日記』（1982年など）（図4）や『ふるさとを調べる』（1984年など）が挙げられる。夏休みの調査活動では地域の屋号調べなどが実施された。

また大野小学校では大野ダムの建設が地域学習の契機となったが（詳細は「4.2. 自然・環境学習」を参



図4 美山町立知井小学校（1982）、『土と汗に求めて』、知井っ子農園日記、第3号。
旧知井小学校内の展示室にて筆者撮影。

照）、その一環として発刊された文集が『ダムの子ら』である（南丹市立文化博物館2017）。1958年1月に第1号、1959年2月に第2号、1960年2月に第3号、1962年3月に第4号が発刊された（大野区誌編集委員会2003）。本文集の刊行にあたっては当時の大野小学校教諭を中心に北星中学校や宮島小学校の教諭らも指導に加わり、第4号は美山町全域の学校による文集になったという（北桑田近代教育誌刊行会1991）。

宮島小学校では、昭和50年代からふるさと学習の取組みが開始された（南丹市立文化博物館2017）。1977年からは夏期休業を利用して地域班でふるさと学習を行い、それを「ふるさとの歴史」としてまとめる活動が長らく続けられたという（南丹市立文化博物館2017）。

4.2. 自然・環境学習

自然豊かな美山町では早くからその地域資源を活かした学習活動が展開されてきた。

大野小学校における地域学習の契機は大野ダムの建設であった。ダム建設工事が始まると工事関係者など約100名の児童が転入し（南丹市立文化博物館2017）、最盛期には250人ほどの児童がいたという⁵。田畑が水没し酪農や茶栽培への転換が進められるなど⁶地域の姿が大きく変革する中、大野小学校ではその変化を記録にとどめようとする教育実践が展開された。文集『ダムの子ら』の発刊はその一環である。また、多くの小学校で共通して取り組まれた田植え体験に加え、地元産業である茶栽培に関連した茶摘みや茶揉み体験も継続的に実施された⁷（南丹市立文化博物館2017）。また、2003年には5年生が水の汚染調査を行い、成果を町民環境フォーラムで発表したという⁸。

鶴ヶ岡小学校では地域の人の指導のもと田植えを行

い⁹、地元で有機農業を推進する協議会の協力を得て水田の生物調査も行っていた¹⁰。

宮島小学校では1990年代後半から「好きです美山、いのち輝くいきいき体験活動」に取り組み、農作業体験や地元高齢者との交流を行ってきた。炭焼きやりんごの摘果を体験したという¹¹。

また、知井小学校では2009年に老人クラブと共同で裏山に鳥の巣箱を設置した¹²。知井小学校は1997年から府の愛鳥モデル校の指定を受け、野鳥の観察やキジの放鳥、民家の軒下で見つかったタヌキの世話などを行っていたという。1999年には環境庁と日本鳥類保護連盟会長賞による日本鳥類保護連盟会長賞を受賞し¹³、2010年には美山のNPO法人芦生自然学校の協力のもと、裏山でナラ枯れ防止について学習した¹⁴。

4.3. 同和教育

宮島小学校は同和教育の先進校であった。宮島小学校では昭和20年代から同和教育に力が注がれ、学校長を中心に学習会も開催されたという。宮島小学校の取組みは府教育委員会から高く評価された。1960年1月に同和教育補習授業が開始され、同時に特殊学級の開設準備も始まった。補習学級は保護者の要望に応じて設置されたものである。1967年には美山町同和教育推進委員会が設置され美山町内の他の小学校でも同和教育が推進されたが、宮島小学校は美山町同和教育研究会を主催するなどその中核を担った。当時宮島小学校では学校経営方針にも同和教育の推進を盛り込んでいた。

1975年には第42回口丹障害児教育研究会を開催し1978年3月には言語障がい学級（ことばの教室）を設置するなど、先進的な取組みがみられた（北桑田近代教育誌刊行会1991、南丹市立文化博物館2017、宮島小学校閉校事業実行委員会2016）。1996年には京都府小学校教育研究会障害児教育研究協力校を委嘱されており（宮島小学校閉校事業実行委員会2016）、特別支援教育の先進的な取組みが長く続けられたことが窺える。

4.4. へき地教育

美山町の小中学校ではへき地教育が先進的に進められており、これも地域学習と関連する。2000年に美山町で開催された第15回近畿へき地教育研究大会では美山中学校、鶴ヶ岡小学校、知井小学校、大野小学校で公開授業が行われ、「いきいき学習、わくわく活動、元気いっぱい美山っ子」をテーマに取り組んできた研究成果を発表した¹⁵（知井小学校閉校記念事業実行委員会2016）。

とりわけ知井小学校がへき地教育の先進校であり、1952年には京都府教育委員会「第二回小さい学校教育研究集会」の開催校となった。同年知井村では役場、学校、育友会による知井僻地教育振興会が設置されており、地域全体の関心の高さが窺える（北桑田近代教育誌刊行会

1991）。また知井小学校は1954年には文部省「へき地教育指定制度」の第1回指定校に選ばれ、翌年には文部省指定のへき地教育研究発表会を開催した。初日に芦生・佐々里・知見・田歌分校での授業公開と分校教育に関する発表があり、2日目には知井小学校の授業公開を行った（知井小学校閉校記念事業実行委員会2016、南丹市立文化博物館2017）。昭和20年代後半のへき地教育の研究主題の1つに「地域社会に立脚する学習指導」が挙げられており、当時から地域との関係性が重視されていたことが分かる（北桑田近代教育誌刊行会1991）。

また、1966年には佐々里分校が文部省のへき地教育研究の指定を受け、同年佐々里分校ではへき地教育「公開授業研究会」が開催された。翌年には京都市で開催された文部省指定のへき地教育研究発表会において、佐々里分校の教諭が研究発表をした。1985年には八ヶ峰中学校（知井地区）が全国へき地教育研究大会の第7分科会場となり、知井小学校も研究協力校として口頭発表を行った（北桑田近代教育誌刊行会1991、知井小学校閉校記念事業実行委員会2016）。1994年には京都府小学校教育へき地教育部の発表会が開催され、2000年には第一勧業銀行系のはあと財団によるへき地教育研究助成金を知井小学校が獲得した¹⁶（知井小学校閉校記念事業実行委員会2016）。

4.5. 副読本発刊と美山町全体での地域学習

地域学習（ふるさと学習）は美山町全体でも進められた。具体的な内容は不明だが、1977年には美山町内の小学校合同の地域学習が始まったという（南丹市教育委員会・鶴ヶ岡小学校閉校事業実行委員会2016）。1980年には美山町の全小学校共通の社会科副読本『わたしたちの美山町』が刊行された（図5）。本書の編集会は美山町教育委員会内におかれ、改訂は1984、1989、1994、2000、2002年に実施された。



図5 社会科副読本『わたしたちの美山町』

また1982年からは淡成会¹⁷主催のふるさと学習が美山町内の全小学校合同で行われるようになった。『わた

し達の美山町』発刊と時期が近く、副読本の編集を契機として淡成会による地域学習が始動したと推測されるが、詳細は不明である。昭和 50 年頃から淡成会が中心となって修学旅行や臨海学習を町合同で実施するようになり、次第に地域を知ることの大切さが強調されて学年毎のふるさと探訪学習が開始されたという。各学年で学習目標を立て、工場や農場、寺社、役場、商店、京都大学芦生研究林など町内の全域をフィールドにして学習した。初年度には、1 年生は集乳センター、2 年生は上ヶ方面・野谷製パン工場（知井地区）、3 年生は農協総合センター、4 年生は町役場・水産センター、5 年生は芦生なめこ工場、6 年生は大野ダム発電所等を訪問した（淡成会 1999、知井小学校閉校記念事業実行委員会 2016、南丹市教育委員会・鶴ヶ岡小学校閉校事業実行委員会 2016、平屋小学校閉校記念事業実行委員会記念誌部会 2016、宮島小学校閉校事業実行委員会 2016）。

ふるさと学習を展開するにあたって、淡成会だけでなく美山町や町農業振興協議会の支援もあった（知井小学校閉校記念事業実行委員会 2016）。2011 年には 5 小学校が合同で「美山っ子かるた」を製作し、各学校や地域の特色などを盛り込んだという¹⁸。

4.6. その他

『わたしたちの美山町』が発刊されたのは 1980 年であったが、その前年には知井小学校で郷土学習社会科資料『わたし達の知井』が刊行された（知井小学校閉校記念事業実行委員会 2016）。刊行年としては『わたし達の知井』の方が早い、『わたしたちの美山町』刊行の動きを受けて『わたし達の知井』が編集された可能性もある。

宮島小学校は 1999 年に「総合的な学習の時間」の研究実践に積極的に取り組む教育実践パイロット校に指定され、地域社会や地域の教育力を活用した教育を展開した¹⁹（宮島小学校閉校事業実行委員会 2016）。岡（2020）によれば、学校教育における地域学習の 1 つの契機は、1992 年開始の生活科ののち 2000 年に小中学校で開始された「総合的な学習の時間」である。宮島小学校でも地域学習や地域との連携は「総合的な学習の時間」の導入を契機により一層進んだと考えられる。2001 年には学校支援ボランティアの活用を理由に宮島小学校は才能開発実践教育賞を受賞した²⁰（宮島小学校閉校事業実行委員会 2016）。

また平屋小学校では伝統的に教育に寄せる熱意が高く、学校と住民が密接に結びつく教育風土が歴史的に醸成されてきたという²¹。2015 年度の学校経営方針には「家庭や“ふるさと平屋”の教育力を生かした教育実践と教育環境づくり」という言葉があり、地域との連携や地域学習の推進が明言されていた（平屋小学校閉校記念事業実行委員会記念誌部会 2016）。

その他、鶴ヶ岡小学校では昭和初期の郷土教育の推進と関わって郷土に立脚した勤労教育が展開された（北桑

田近代教育誌刊行会 1991）。大野小学校では 1993 年に美山っ子村おこし実践活動に取り組んだというが（大野区誌編纂委員会 2003）、具体的な内容は不明である。

5. 各小学校における授業外や特別活動での地域学習

授業外での地域学習や地域との交流も各小学校で行われてきた。福祉教育の一環などで地元の高齢者との交流が早くから行われており、学校行事を地域と合同で開催する例も多く見られる。児童数の減少も背景にあるだろうが、地域の人が学校と、また児童と関わる機会を提供することにもなり、日々受けている地域からの支援に対して学校側が還元する機会にもなっている。また、地域と学校が共催する文化祭や講演会は児童生徒が「地域と学ぶ」側面も持つ。祖父母との交流がさかんな点も美山町内の小学校の特徴である。

5.1. 福祉教育や高齢者との交流

平屋小学校では「自立できる子ども」の育成を基本に据えながら福祉教育や心の教育に力を入れ、福祉施設の訪問や高齢者との交流、障害のある方の話を聞くといった活動を行ってきた。祖父母とのふれあい学級も開催したという²²。祖父母参観は大野小学校でも実施された。2013 年の参観では児童が行ったディベートの判定役を祖父母が務め、「美山っ子かるた」で親睦を深めるなどした²³。

また知井小学校では 2007 年には「ふるさとを愛する心豊かな児童の育成」という教育目標と関連して地域の高齢者との交流が行われ、朝顔を高齢者に送る活動が毎年続けられていた²⁴。宮島小学校でも 1990 年代後半から「好きです美山、いのち輝くいきいき体験活動」の一環として地元高齢者との交流を行ってきたという²⁵。鶴ヶ岡小学校での世代間交流事業は 1984 年から実施され、1985 年の交流ではゲートボールや環境整備に取り組んだ（南丹市教育委員会・鶴ヶ岡小学校閉校事業実行委員会 2016）。また、2006 年には南丹市と同市社会福祉協議会主催の美山町敬老会が美山町内の各地区で開催され、大野地区の敬老会では大野小児童が太鼓を演奏したという²⁶。

5.2. 学校と地域の合同行事

知井小学校の「知井地区文化の集い」は 1991 年から閉校まで毎年続けられ、児童や地域住民が劇を発表したり、昭和 30 年代の生活用具を展示したりしたという。実行委員会は学校と地域の各種団体に組織されていた²⁷（知井小学校閉校記念事業実行委員会 2016）。知井小学校では人権講演会を知井振興会と共催する²⁸など、「地域に教わる」「地域で学ぶ」だけではなく「地域と学ぶ」ことも実践されていた。学校での芸術鑑賞会などに地域の人や保護者が参加する事例は美山町内の他の小学校で

も見られる²⁹。

平屋小学校では1985年に育友会主催の「ふれあい登山」で地元の平屋富士への登山が実施された（平屋小学校閉校記念事業実行委員会記念誌部会2016）。また、2003年に美山町内の小学校では初となる地元の振興会との合同運動会を開催した（南丹市立文化博物館2017、平屋小学校閉校記念事業実行委員会記念誌部会2016）。合同運動会は小学校再編まで継続され、美山町内の他の4小学校でも各地域の振興会と合同で運動会を実施するようになった³⁰（南丹市教育委員会・鶴ヶ岡小学校閉校事業実行委員会2016）。この頃から地域の諸団体との共催事業がより一層活発化し、2004年には振興会と共催で学習発表会「ひらや芸能のつどい」を開催した（平屋小学校閉校記念事業実行委員会記念誌部会2016）。また2009年には「地域ふれあいサロン」を開始して地域との連携をさらに深めた（南丹市立文化博物館2017、平屋小学校閉校記念事業実行委員会記念誌部会2016）。

鶴ヶ岡小学校の「鶴小フェスティバル」は2007年から開催が確認された（南丹市教育委員会・鶴ヶ岡小学校閉校事業実行委員会2016）。「鶴小フェスティバル」では米作りの学習指導をした地域の方への感謝を伝える時間帯も設けられており³¹、地域への還元の間として機能したといえるだろう。

大野小学校では小学校が主催、大野振興会などが共催する「にじの子カーニバル」という文化祭が1992年以降毎年開催され、児童と地域が交流する場となってきた³²。これは従来の学芸会をより多彩な内容としたものである（南丹市立文化博物館2017）。

6. おわりに

本稿では2016年の小学校統合以前に美山町内の各小学校でどのような地域との連携が見られたのかを各校の閉校記念誌や新聞記事を資料として概観した。その内容を簡潔にまとめると以下の通りである。

地域が主体となって学校を支援する例としては育友会や読み聞かせグループの活動があり、育友会は行政への陳情や学校の備品購入など活発な活動を見せた。

地域学習は小学校ごとに多岐にわたる活動が展開された。知井小学校や宮島小学校を中心に調べ学習や作文教育と関連させた地域学習が展開され、大野ダムの建設を契機とした大野小学校の地域学習のように、地元の自然や環境を教材とした実践も活発であった。また地域学習は同和教育やへき地教育としての側面も持ち、美山町内の小学校は全国的な先進校として評価されていた。また1980年には美山町内の全小学校共通の社会科副読本『わたしたちの美山町』が発刊され、この頃から小学校合同での地域学習も盛んになった。

授業外や特別活動での地域との交流も活発であった。各小学校で地元高齢者との交流を実施したり、文化祭や

学習発表会、運動会を地域振興会と合同で開催したりしてきた。文化祭が普段お世話になっている地域への感謝を伝える場として機能する例もあった。

このように美山町では統合前の各小学校において地域と密接に連携した活動が展開されており、地域が学校教育を支援する基盤があった。このことを前提に美山小学校・中学校における「美山学」が成立したと考えられる。また先行研究では若手教員や高学年配属の教員が地域学習を負担に感じていることが指摘されていたが、「美山学」では地域学習が学校全体のシステムとして確立しており、教科どうしの関係も明確に示されている。「学校探検や地域の行事を通して四季の移り変わりを感じながら自然とかかわる」（小学校1年生）のように学年ごとの学習のねらいも設定されており（南丹市立美山小学校2018）、教員が自分なりの実践を展開する余地はありつつも一から教材開発を行う必要はない。教員が決めた授業テーマに合う地域資源を地域連携コーディネーターが紹介してくれるなど、教員の負担を軽減する努力がなされている。

本研究は統合以前の小学校における地域学習の実践を整理し記録に留めた点に意義がある。最後に、これらの実践が具体的にどのように「美山学」に継承されたのか（もしくはされていないのか）を簡単に検討したい。地域による学校教育の支援としては、読み聞かせ活動が現在でもボランティア団体によって担われている。また地元の人をゲストティーチャーとして招いたり閉校した学校などをサテライト教室として活用したりする取組みは、「美山学」でシステム化されたことによって現在の方が活発な様相を見せている。またへき地教育としての側面も維持されており、美山小学校は第67回全国へき地教育研究大会京都大会の分科会や第9回京都府へき地・小規模校教育研究大会にて実践発表を行った（南丹市立美山小学校2018、2021）。福祉教育や勤労教育も美山小学校では生活科や社会科などの該当単元の中に位置付けられている（南丹市立美山小学校2018）。一方で、新聞記事などを参照するかぎり、地域との合同行事は小学校統合以前の方が活発であった。

本稿では美山町内で早くから地域学習が活発に展開された背景について十分考察できなかったため、今後の課題としたい。また「美山学」そのものの体系、そして地域資源活用の実態および在り方についても、稿を改めたい。

謝辞：本研究を進めるにあたり、南丹市立美山小学校・美山中学校では各小学校の閉校記念誌をはじめとした豊富な資料を閲覧させていただきました。心よりお礼申し上げます。

注

- 1) 2000年4月26日京都新聞朝刊19ページ「美山郷土資料館がオープン ふるさと支えた道具類ズラリ

- かやぶき民家を活用 生活必需品など500点」
- 2) 2014年6月25日京都新聞朝刊22ページ「絵本の良さ伝え10年 美山の読み聞かせグループ「赤ずきん」 地元民話の紙芝居 3作目を制作」、2016年3月18日京都新聞朝刊20ページ「読み聞かせいつもありがとう 統廃合の美山5小で最後の朗読会 児童 手紙や色紙贈る」
 - 3) 知井小学校閉校記念事業実行委員会(2016)には『知井っ子』と記載があるが、文集を見るかぎり『知井ノ子』が正しいと思われる。
 - 4) 1996年11月26日毎日新聞朝刊 地方版/京都22ページ「府教委の「さわやか賞」 知事賞に高籠中学校 /京都」
 - 5) 2015年9月1日京都新聞朝刊22ページ「おまかせ写真館(61) 大野小(南丹市美山町) 旧校舎住民自ら敷地造成」
 - 6) 2012年11月20日京都新聞朝刊22ページ「“ダムの子ら”を訪ねて 大野ダム半世紀(4) 乳牛と茶園 転業対策から特産品」
 - 7) 2006年5月26日京都新聞朝刊22ページ「「おいしいお茶に」一葉ずつ 南丹 大野小児童が茶摘み」、2007年5月26日京都新聞朝刊23ページ「学校で飲む茶、摘んだよ 南丹・大野小 祖父母らも応援」、2010年6月10日京都新聞朝刊19ページ「茶摘みいい香り 南丹・大野小 児童ら40キロ収穫」
 - 8) 2003年3月16日京都新聞朝刊29ページ「水問題や環境保全訴え 美山で町民フォーラム」
 - 9) 2005年5月11日京都新聞朝刊20ページ「泥と格闘 田植えにハッスル 美山・鶴ヶ岡小(たんばっこ)」
 - 10) 2008年7月17日京都新聞朝刊24ページ「田んぼにどんな虫いるの 南丹・鶴ヶ岡小 学習用水田で調査」
 - 11) 1999年3月11日京都新聞朝刊24ページ「発信学校から(15) 宮島小学校(美山町) シンボル美山杉で校舎」
 - 12) 2009年3月18日京都新聞朝刊22ページ「廃校の裏山 小鳥の森に 南丹・知井小児童ら 手作り巣箱設置」
 - 13) 1999年5月20日京都新聞朝刊22ページ「知井小学校が功労者表彰 美山町 野生生物の保護評価 鳥類保護連盟・会長賞伝達」
 - 14) 2010年11月11日京都新聞朝刊20ページ「ナラ枯れ防止 児童学ぶ 南丹の知井小」
 - 15) 2000年11月2日京都新聞朝刊26ページ「地域と結ぶ実践学ぶ へき地教育研究大会 近畿各地から250人 美山町」
 - 16) 2000年6月10日京都新聞朝刊29ページ「美山町の知井小にへき地教育研究助成金 はあと財団」
 - 17) 淡成会とは1898年に京都府北桑田郡の北部(現在の南丹市美山町周辺)の学校教員によって設立された組織である。教員どうしの親睦を深めたり教員自身の教育力を高めたりすることが目的とされた。
 - 18) 2011年11月5日京都新聞朝刊23ページ「ふるさと美山 かるたに 5小学校、合同で手作り」
 - 19) 2000年1月29日京都新聞朝刊24ページ「「総合学習」の実践発表 パイロット校の宮島小学校 美山」
 - 20) 2001年11月14日京都新聞朝刊24ページ「才能開発実践教育賞で授賞式 美山の宮島小学校」
 - 21) 1999年1月28日京都新聞朝刊22ページ「発信学校から(9) 平屋小学校(北桑田郡美山町安掛上ノ山17)「自立できる」教育に力」
 - 22) 前掲註21
 - 23) 2013年6月18日京都新聞朝刊18ページ「祖父母参観 かるた交流 美山・大野小 給食も一緒に味わう」
 - 24) 2008年7月23日京都新聞朝刊24ページ「アサガオの鉢どうぞ 南丹・知井小 一人暮らしのお年寄りへ」
 - 25) 前掲註11
 - 26) 2006年10月7日京都新聞朝刊24ページ「児童の太鼓に笑顔も若やく 南丹・美山 敬老会始まる」
 - 27) 2006年12月4日京都新聞朝刊20ページ「児童、住民ら交流 劇や舞踊を披露 南丹 知井小で文化の集い」、2011年12月14日京都新聞朝刊20ページ「コカリナの音色 優しさ奏で 第一人者の黒坂さん 南丹・知井小で披露」
 - 28) 2008年2月19日京都新聞朝刊24ページ「性教育授業、保護者ら見学 南丹・知井小 障害児支援の講演も」
 - 29) 2004年4月14日京都新聞朝刊21ページ「能のかけ声に児童驚き 美山でコンサート 基本動作も学ぶ」、2007年7月11日京都新聞朝刊20ページ「名曲に児童らうっとり 南丹の2小学校 京フィル合奏団鑑賞」
 - 30) 2006年10月2日京都新聞朝刊22ページ「大野地区初の合同体育大会 三世代そろい 歓声 南丹」、2007年1月29日京都新聞朝刊22ページ「劇や学習発表 熱心に 南丹・平屋小で「文化のつどい」」、2014年3月29日京都新聞朝刊24ページ「合併10年へ 2014南丹市長選(下) 揺らぐ地域拠点 新たな自治 住民模索」、2015年9月21日京都新聞朝刊18ページ「最後の運動会 忘れない 美山の統廃合控えた2小 平屋 住民らと人文字 鶴ヶ岡 手つなぎ一輪車」、2015年9月28日京都新聞朝刊18ページ「最後の運動会 思い出込め 宮島、大野、知井の3小 統廃合控え」、2015年10月6日京都新聞朝刊24ページ「おまかせ写真館(66) 平屋小(南丹市美山町) 地域に愛されたまなびや」、2015年10月14日京都新聞朝刊26ページ「フォグランプ 森静香 最後の運動会」

- 31) 2007年12月9日京都新聞朝刊26ページ「学習発表や太鼓演奏披露 南丹 鶴小フェス 児童と住民が交流」
- 32) 2007年12月2日京都新聞朝刊26ページ「劇や合唱上手にできた 南丹・大野小でカーニバル」、2012年11月25日京都新聞朝刊22ページ「気分は俳優 児童ら熱演 南丹・大野小で劇発表会」

参考文献

- 入江彰昭・町田怜子・中道真太郎・宮林茂幸（2018）、「小学校の地域学習プログラムにおける多様な主体の連携に関する考察」, 東京農業大学能楽集報, 第63巻2号, pp.74-82.
- 大坂遊・草原和博・宇ノ木啓太・小栗優貴・玉井慎也・守谷富士彦・岩佐佳哉・宅島大亮・両角遼平・青木理恵・岩崎泰博・正出七瀬・瀬谷敦之・鉦悠介・桃原研斗（2021）, 「探究的な学びを支援する小学校社会科地域学習用デジタルコンテンツの開発と活用（3）：広域交流型オンライン社会科地域学習の構想」, 広島大学大学院人間社会科学部研究科紀要 教育学研究, 第2号, pp.302-310.
- 太田尚孝・米正竜太（2021）, 「高校生と大学生が共に学ぶ短期集中型の地域学習プログラムの開発・実践・評価：兵庫県立北摂三田高等学校と兵庫県立大学との高大連携事業を事例に」, 都市計画報告集, 第20巻3号, pp.292-297.
- 大東貢生（2020）, 「学校を中心とした地域活性化の可能性について—南丹市美山町でのコミュニティ・スクールの展開から—」, 佛教大学総合研究所紀要, 第27号, pp.65-78.
- 大野区誌編纂委員会（編）（2003）, 悠久の雲 流れきて—大野区誌, 京都府北桑田郡美山町大野区, p.345.
- 北桑田近代教育誌刊行会（1991）, 北桑田近代教育誌, 北桑田近代教育誌刊行会, p.373.
- 佐藤正寿（2021）, 「いわての復興教育副読本による総合的な学習における地域学習の内容と可能性」, 東北学院大学教育学科論集, 第3号, pp.87-95.
- 篠原重則（1992）, 「小学校3学年「身近な地域」の授業実態と教師の意識—香川県の事例—」, 新地理, 第40巻3号, pp.14-28.
- 竹内裕一（2019）, 「地理教育における地域学習の位置—子どもたちの地域学習体験からの逆照射—」, 新地理, 第67巻1号, pp.1-12.
- 淡成会（1999）, 淡成会百年 百周年記念誌, 淡成会創立百周年記念事業実行委員会, p.217.
- 知井小学校閉校記念事業実行委員会（2016）, 知井小学校閉校記念誌「久遠の姿」, 知井小学校閉校記念事業実行委員会, p.96.
- 友居秀行（2022）, 「尼崎市における地域学習のあり方の研究—地域学習の授業実態と教師の意識調査を通して—」, 兵庫教育大学地理学・地理教育研究室研究報告, 第27巻, pp.10-20.
- 南丹市教育委員会・鶴ヶ岡小学校閉校事業実行委員会（2016）, 鶴ヶ岡小学校閉校記念誌「鶴陵」, 鶴ヶ岡小学校閉校事業実行委員会, p.189.
- 南丹市立文化博物館（2017）, 平成29年度春季企画展 学校のあゆみ～美山地区編～, 南丹市立博物館, p.55.
- 南丹市立美山小学校（2018）, 平成30年度研究紀要「自ら考え、伝え合い、学ぶ喜びを実感する児童の育成」～美山学の実践を通して～, p.238.
- 南丹市立美山小学校（2021）, 令和3年度研究紀要「探求的な学習を通して、よりよく問題を解決する資質・能力や主体的・協働的に取り組む態度を育成する授業の創造～自ら考え、伝え合い、学ぶ喜びを実感する児童の育成～美山学の実践を通して～」, p.16.
- 橋本実果（2018）, 「小学校社会科における新旧の地図を用いた地域学習：京都市を例として」, 京都教育大学大学院教育学研究科修士論文.
- 菱山充恵（2022）, 「三年生の地域学習：先生も子どもも楽しく：小学校の授業3年」, 歴史地理教育, 第935号, pp.36-41.
- 平屋小学校閉校記念事業実行委員会記念誌部会（2016）, 流動 絆のあゆみ 南丹市立平屋小学校閉校記念誌1873-2016, p.189.
- 藤崎聖矢（2021）, 「教科書と副読本の内容別グラフ比較から考える地域学習に関連づけた統計学習」, 日本教育工学会研究報告集, 第3号, pp.142-149.
- 松尾朱夏・平田利文・小山拓志（2019）, 「大分県公立小学校における地域学習の現状と課題—現職教員を対象としたアンケート調査を基に—」, 大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 第37巻, pp.51-64.
- 三橋昌平（2021）, 「校歌を使った地域学習：三年生の「総合的な学習の時間」：実践報告/小学校」, 歴史地理教育, 第927号, pp.130-133.
- 宮島小学校閉校事業実行委員会（2016）, 南丹市立宮島小学校閉校記念誌「求道」, 宮島小学校閉校事業実行委員会, p.117.

